

生態人類学会ニュースレター

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

1997年7月10日発行

特集 原子令三氏追悼

弔 辞

弔辞を述べさせていただきます。

原子さん、いってしまうのがやっぱり早すぎたよ。この2週間と少しの間、私は日に日に変わっていく原子さんを見ながら、何か現実ではないような気持ちでした。3日前に帰らぬ人になってしまったから、よくわからないまま、「原子さんは死んだんだ」と自分に言い聞かせるのが精一杯でした。

原子さんは、東北大学の医学部を卒業され、しばらく医者業をした後、人類学を志し、1965年に東京大学理学部人類学教室にこられました。1年間研究生をした後、博上課程を終え、1970年に京都大学理学部自然人類学教室の助手になられました。

私は、原子さんが東京大学にこられたとき、人類学教室の3年生として進学した者で、以来本当に身近にお付き合いさせていただきました。私たちは、学生と大学院生のあいだ、夕方ともなれば酒を飲む、それもたいていは、まさにこの近く、原子さんが荻窪に下宿していたこともあり、ジュニアというスナックで時を忘れて語り合っていました。そして、原子さんの下宿に転がり込むか、ジュニアの2階で寝泊りするのが日常でした。

原子さんは主としてアフリカを調査していました。私はいまもニューギニアにいておりましたので、海外調査を御一緒する機会はありませんでしたが、国内では何度か一緒に調査にいったことがあります。たとえば、私が調査していた瀬戸内海の漁村にいったとき、私は頻りにフィールドノートをつけるのですが、原子さんはそのようなこともなく、東京にあるいは京都にいるときと同じような調子で暮らしていました。それでも、漁師の人たちから一目置かれるというか、親しみと敬意をもって迎えられていました。そして、原子さんはこの本質をま

ちがいなく把握していました。

原子さんは、東大においても、そして京大のほうがもっと数が多かったと思いますが、人類学の後輩、特にフィールドワークを目指す私たちの礎でした。何も具体的な調査の方法を教えてもらうというようなことはないのですが、原子さんと話をしていると深いところで刺激されるというか、次の調査への意欲をかきたてられたものでした。本当に多くのことを話しましたが、今思えば、原子さんは「真実」とは何か「愛」とは何かを私たちに語っていたんだと思います。

私は、原子さんが入院していた東京専売病院には比較的近くにおりますので、病床の原子さんに毎日のように会うことができました。この間に、原子さんは二つのことを私に言いました。一つは、明治大学の学生さんのことでした。実は私たちは教授としての原子さんのことをあまり知らないのですが、学生のことを気にしていた、きっといい先生だったのだらうと思いました。二つ目は、これは入院した翌日の9月28日のことだったのですが、「もし、体調が戻ったら遺書でも書こうかな」と言ったことです。私たちが原子さんの本を是非読みたいと思っていました。でも、そう言われた後に、とてもその話を具体的にするような機会はありませんでした。私たちは、この原子さんの遺志をどうにか実現しようと思っています。もちろん、「原子人類学」は原子さんしか書けるわけではないのですが、でもやってみるつもりです。

原子さん、もうしかたない、ゆっくり休んで下さい。

1996年10月16日

大塚 柳太郎

記事

原子令三氏を悼む

西田 利貞
京都大学理学部

原子さんを知ったのは、32年も前のことだ。1965年の5月頃東大・京大合同若手研究会なるものが、自然人類学講座の葉山杉夫さん（当時助手）の肝いりで京大動物学教室で初めて開かれた。助手や最年長のODとして、東大からは理学部人類学教室の尾本恵市、石本剛一、文化人類学の川田順造、須恵ひろ子、畑中幸子などの諸氏が参加されたのを覚えている。発表は3人だけで、それぞれのグループから代表が一人ずつ修士論文を発表した。東大人類は岡田守彦、文化人類は神部武宣、そして京大は私であった。一人、学生に混じって大物と思われる人物が大声でしゃべっていた。何者かと思ったら、院生らしいということだった。それが、原子さんだった。彼の印象はそれからまったく変わらない。年をとらないというよりも、はじめから年をとっていた、という感じがする。

1969年12月、私は東大人類の助手として採用された。当時、東大は紛争が終わったばかりで、まだ余燼がくすぶっていた。どの部屋に机を置こうかと、私はいくつかの候補地を訪問し、いちばん興味の近そうな生態人類の大部屋に入れてもらおうと思った。そこには、大塚や武田という修士の学生がいて、それに先年亡くなった遺伝の豊増や、葭田という研究生などがたむろしていた。私がこの部屋に入ると、学生諸氏は「権力」が公募して選んだ助手を、一様に胡散臭い目で見つめるのであった。これにはたじろいだが、私の修士論文は「ヒトリザルの研究」である。ヒトリザルとはこういう気分で別の群れに入るのかなとおもいつつ、机をおかせてもらったものだ。先が思いやられたが、数日でこれは杞憂に終わった。原子さんから、「西田さん、なにか書いたものがあつたら、一つだけ選んで読ませてくれませんか」というご所望があった。英訳した修論1本しか印刷された論文はなかった。原子さんは、両脚を机の上ののせる例の姿勢で読み続け、なんと読了されたのである。そして、試験はパスした。首尾一貫しているからよい、という評価だった。彼は大塚氏や武田氏に「西田さんはいい人らしいから、仲間に入れてあげよう」といつてくれた。こうして、私は、原子さんのおかげで、苦勞せずに生態グループの

一員になれたのである。もっとも、しばらくはおつきあいが大変だった。午後1時頃、突然、「みんなでおもしろい映画を見るから、すぐ出てこい」といった内容の電話が銀座から部屋にかかってきて、月給取りがオフィスから連れ出されてしまうのである。

翌年8月には、今度は原子さんが京大へ移られることになった。西田を京大にとってもらったのだから、という伊谷さんの配慮もあったのだろう。しかし、その前に伊谷さんは原子さんと神田のバー・カントリーで会っていて、いつかコンゴ盆地を二人で横断しようと、意気投合していたのである。

私が原子さんのフィールドを訪ねたのは、後にも先にもただ一度、1970年の秋の嵯峨島訪問だけである。私は妻と先に荒川温泉で待ち、原子さんは掛谷君、大塚君とやってきた。島につくと、原子さんは大塚君とすぐイカつりに出かけた。数日私たちは滞在したが、土地訛りをあやつる原子さんが村の中にとけ込んでいる様子が伺え、ほのぼのとしたものを感じた。掛谷君と私が島の植生図を完成させるため主な植物を採集し、村田源先生に同定してもらった。植生図は原子さんの論文の片隅を飾った。この旅行は、ダンチクという竹の名とともに、忘れがたい思い出である。

アフリカで原子さんと最初に会った場所は、ブカブである。1973年7月、加納さんと私は、ボノボの予備調査の許可を得るためにIRSACを訪ね、東北大学の浜口先生宅にお邪魔した。そのとき、新米の丹野正君を出迎えにイトウーリから原子さんがジーンズ姿で出てきたのである。原子さんは大はしゃぎで、ピグミーの話をしてくれた。今思えば、彼がいちばん元気よかったときだった。

私が東大を離れて京都に移る1988年3月、東京の友人たちが箱根で送別囲碁会を開いてくれた。これが結局第1回原子杯へと変身し、生態人類学研究会の前に囲碁会をもつという習慣ができた。原子杯は、今年でちょうど10回目を迎えることになったが、主はいない。昨年4月、原子さんの還暦を祝って7人で還暦祝賀囲碁大会を熱海で開いた。私は3月31日をもって禁煙して囲碁会に参加した。「煙草をやめた」と原子さんに言ったら、「裏切り者」という言葉が浴びせられた。それが、私のはっきりと覚えている彼の最後の言葉なのかなしい。

9月、大塚君から入院されたことを聞き、お見舞いの日を決めたら、その日がお通夜の日になってしまった。多忙だったとはいえ、悔いが残る。

偉大なエビキュリアンが亡くなった。あの人におつきあいしていただいただけでも、私の人生は意味があった。

原子さんを思う

早弓 惇
日本女子体育大学

関東地方に春一番が吹いたといわれる今日、原子さんを思うと歌が浮かんできます。おぼろな記憶ですが、キャンディーズの歌だったでしょうか。また、別の歌だったか、お引越しのお祝いがえしという歌詞が論じられたこともありました。鈴木尚先生に連れられて登場した原子さんは26歳であったと記憶しています。以来、教室で同席したこともあったはずですが、原子さんの印象はどうしても、荻窪の珠仁屋と切り離せなくなります。ここでは最新流行の歌の数々が原子さんによっても導入され、春一番が口ずさまれたのです。合唱が始まるとロシア民謡やラジオ歌謡にまでいたりします。なないろのにじをこえて... わになってわになあつてと原子さんの声が聞こえてくるようです。囲碁が強いとは聞いていましたが、当時はしりだったビデオゲームのレンガ崩しに熱中する姿や、パチンコ、競馬、麻雀などの話を聞く限りでは、とにかく遊びが好きということのようでした。フィールドに備えてと称しての走ることから、泳ぐ、テニスそして最近のゴルフと、運動なら何でも好きのようですが、サッカーや野球の話は聞いた覚えがありません。なにか評価基準があったのでしょうか。

人類学の生態分野では、カリスマ的な位置を占めているようにみえましたが、理論的にどうこうというより、原子さんの存在そのものが、生態学の核心に近かったのでしょうか。珠仁屋における人間観察めいた発言から、直感的洞察とはこういうことかなと感じたものでした。クソリアリズムという言葉を度々耳にしたような気がします。どういう意味が分かりませんでした。

何の会合だったのか、確か読売ランドで、互いに自己紹介をする場面があり、私は苦し紛れに人間器械論が専門ですと口走ったことがあります。そのとき原子さんに、ナントカ・ド・ラ・メトリの本があるよと教えてもらいました。医者としてのリアリズムが原子さんの底にあったのでしょうか、文学青年的な表現：ダーさんやドスちゃんやわぎもこへの言及、やアフリカへの思い入れからは、ロマンチストというのがあたりでしょう。デズモンド・モリスの裸のサルに、多数派の普通人についての関心が不足しているといった趣旨があったのに対して、大いに異議を唱えたこともありました。ピグミーへの関心とつながっていたのでしょうか。不死身の原子と思っていたのになぜと感慨めいたものがつい浮かびます。京都に移られてから、また明治大学に来られてからも、お会いする機会はあまりなかったのですが、再会すればまったく変わらない原子さんがそこにいるのでした。今回はもつと長い不在ということになりますが、私にとっては原子さんはどこかに存在するのです。

囲碁と酒と海と—原子さんの沖繩

加納 隆至
京都大学霊長類研究所

1970年の夏、私が琉球大学へ赴任する少し前のことだった。しばらくぶりに京大の自然人類学研究室へ顔を出すと、たばこの煙もうもうたるあのゼミ室で、おっさん顔の巨漢が、大勢の院生の見守るなか、悠然と碁を打っていた。「ははあ、これが名にしおう原子さんだな」と一目で知れた。原子さんという、えらく碁の強い人が助手としてやってくると、かねてから聞いていたのである。早速一手お願いすることにした。

「最初は井目からやってみようか」といわれ、多少むつとしながら九目置く。何しろ私は、沖繩へ行くまでは、学問の師であり碁の師匠でもあった伊谷純一郎先生を五子にまで打ち込んで、鼻息はすこぶる荒かったのだ。石を九つも置いて負けるほうがどうかしている。桂馬にかかってきた石を、何をとばかり一間にはさんで攻めた。

猛攻に次ぐ猛攻……気がつくとも、結果は惨敗だった。狐につままれたような気持ちだった。しかも、「初手の一間ばさみがおかしいんじゃない?」と言われてしまった。

原子さんは、京大に赴任するとすぐ沖繩にフィールドを持った。本土復帰の一年以上も前のことだ。たしか最初のフィールドは、本島南部に近い久高島だった。フィールドへの出入りのたびに、那覇の私のほろアパートに立ち寄ってくれた。私はもう嬉しくてたまらない。待ちかねたように碁盤を取り出し、対局を願った。そして井目で負け続けた。当たるをさいわいなぎ倒し、という私の流儀ではどうもうまくいかない気づかされて、宮下秀洋著の「星と三三の作戦」を買ったのはこの頃である。生まれてはじめて買った定石書だった。覚え込むほどにまで読みこんだ。この本は名著だった、と思う。あれほど負け続けた私が、井目を脱出したばかりでなく、ついには三子にまでなったのだから。

しかし、定石書に接してはじめて、原子さんの打ち方について心に残ったことがある。原子さんの応手は、探せばこの置碁の本のどこかでかならず見つかった。つま

り、まともな手でいくかぎり、原子さんはいつもまともな手で対応してくれた。下手をまどわすだけが目的の手は決して打たなかった。彼は最後までこの打ち方をくずさなかった。突拍子もない手で弱いものを混乱に陥れて討ち取ってしまうというのは、原子さんの美意識に合わなかったのだろう。彼の周囲にいた男子も女子もすべて、誘い込まれるように囲碁を打つようになっていった。そのわけが分かるような気がする。囲碁のあとは、夜のちまたに繰り出した。原子さんは、「あ、今日もきのうの乙姫さまのところがいい」などという。

沖縄には当時から琉球舞踊や民謡をだしものとする店がたくさんあった。踊り手や歌い手の女性は、白い顔にくっきりとした目鼻立ちで、長い髪をあの特徴的な形に高く結い上げ、派手な紅型の着物をまとっている。原子さんは彼女たちを「乙姫さま」と呼んでいた。原子さんは乙姫さまたちにも人気があった。彼女たちは、ショウのあいまには私たちのテーブルにやってきて、御酌をしてくれ、明るく笑い、沖縄弁でお喋りをしていった。

民謡ショウが終わるとナイトクラブが定番だった。原子さんは興に乗ると時にホステスとダンスを踊った。本格的な社交ダンスだった。チークダンス一本槍の私と違って、原子さんはくるくる回るワルツが踊れた。うらやましかったものだ。

このように私は、原子さんに囲碁を教えてもらい、酒の飲みかたも教わった。さらには海での素潜り遊びもだ。

復帰のあと、武田淳、佐藤弘明という二人の仲間が沖縄に加わり、にぎやかになった。原子さんが沖縄に来るたびに、毎夜の酒盛りは相変わらずだが、かならず四人で海に出かけたものだ。最初の頃は近場の南部で遊んでいたが、あきたりなくなって、中部から北部へと足を伸ばすようになった。ボートを買って、日帰りから民宿泊り、

はてはテントを担いで離島でキャンプを張る、とエスカレートしていった。

北部東海岸の安田（あだ）という村落の近くに、人影のないさびしい入り江がある。ここは私たちの発見した穴場のひとつだった。小じんまりした入り江ながら、100メートルも泳いで出ると急に海底は崖となって落ち込み、巨大なテーブルさんごがその斜面に層をなしている。透明な青く暗い深みから、エラブチャー（ブダイ）やツヌマン（テングハギ）の群れが湧くように舞い上がってきては舞い下っていく。追いまわすがなかなか突けたものではない。原子さんは三メートルばかりもぐってやすを振るっていたが、手を止めて、水面の私を水中眼鏡越しに見上げ、片手をあげてにっこり笑ってみせた。さんごの陰から引き出したやすの先にはうちわのような幅広い魚が刺さっている。ガラサーミーバイ（イシガキダイ）だった。沖縄ではきわめて珍しい魚だ。幻の魚といってもいい。原子さんはその日はミーバイ（ハタ）も突いた。夜、民宿で皆でその塩焼きをつつきながら、自慢されたこと。あの日は間違いなく、沖縄本島の海での原子さんのハイライトだった。

原子さんの告別式で、喪主の修一氏が「弟、令三はわがまま者で皆さんにさぞご迷惑をおかけしただろう」とおっしゃった。たしかに原子さんは自分のしたいことしかやらなかった。その意味ではわがままと言えるかもしれない。とかくわがままを通す人は、まわりの人に我慢を強い、ストレスを与えるので好かれない。しかし、もし原子さんのあれをわがままというのであれば、彼のわがまは特別だった。それはいつでも人を愉快にさせ心はずませた。だから、どこへ行っても原子さんの旗の下へ、多くのファンが集ってきたのである。このような天性を持った人がいつまたこの世に現れるのだろうか。

半パンにスリッパ姿で フィジーから帰った原子さん

片山 一道
京都大学理学部

原子さんについて、あれこれと思い出していると、「やーやー、片山あ!」と目の前に現れてきそうな錯覚にとられる。あの大吃い、大酒のみ、ヘビースモーカーの原子さんが逝ってしまったなんて、4ヶ月たった今でも、まったく信じられない。嘘やろ原子さん。

私にとって原子さんは、いつも何でも、お師匠さんだった。原子さんが助手で私が大学院生だった頃から四半世

紀くらいの中に、めちゃくちゃ多くのことを教えられたように思う。もちろん人類学について。競馬や碁やマージャンの遊び方について。ときに生きざまの問題について。そして酒の飲み方についても。人類学について言えば、具体的な研究内容や研究方法などはともかく、人類学者の心というものを教わったように思う。「つねに空気のごとくあれ」という自然流の構えと、「つねに人びとを愛せよ」という付き合いかたが、私のフィールドでのスタンスだが、それは実は「原子流」でもあったのだ。原子さんがポリネシアの私のフィールドを訪ねてきたとき、そのことがよく分かった。

あれは4年前だったか。私の調査地、ポリネシアのクック諸島まで漫遊の旅に来られた。けっこう早起きの

原子さんは宿で読書三昧の日々。ときおり周辺を散策しては、島民たちとおしゃべり。現地の人たちには「ケレアラコ」と呼ばれ愛されていた。ポリネシア語の意味はブッシュ・カナリア。この鳥は鳥に固有種で、けたたましく鳴く。原子さんが喧騒なわけではない。ハラコに由来するのだ。

9月のある日、クック諸島の首都ラロトンガで別れ、私はオーストラリアに向い、原子さんは、トンガ、サモア、フィジー経由で帰路についた。途中、原子さんはサモアからフィジーの間、飛行機に預けた荷物を無くしたらしい。着のみ着のまま、半パンとスリッパ（ビニール製の飲み屋のトイレでよく見かけるやつ）姿で成田に帰ってきたそうだ。いかにも原子さんらしい話しではある。

なんと言っても、原子さんが私に残した最大の遺物は競馬である。大学院の頃、いつも土日は競馬場におとしました。京都競馬場だけでなく阪神競馬場にも、ほとんど毎週のように出かけた。いつもは遅い原子さんだが、土日は早朝の8時に研究室に現れた。研究室で歯を磨き顔を洗う原子さんと落ち合って、進々堂に向かう。そこにはミックのマスターが待っており、やおら競馬場に向かうのである。たいていは第一レースに間に合うよう競馬場に着いた。

原子さんの競馬は楽しかった。やさしい視線を凝らして、じっくりと馬をめぐる。案外、無茶はせず、よく的中するのである。そして「はい当たりました」とにっこり。そんな競馬であった。

東京に移られても、けっこう府中の競馬場におとしました。ともに競馬場に行った最後は、3年前のこと。11月の京都競馬場である。菊花賞の日だった。その日は、私たちの共有馬のデビュー戦でもあった。その馬は見事に優勝した。その馬がゴールした瞬間、原子さんは、しっかりと私を抱擁し、満面の笑顔で祝福してくれたのである。その笑顔は今でも忘れない。

実は、原子さんは私の長男の名づけ親である。これも競馬と関係があるのだが、誤解を招くといけないので、ここでは割愛する。とにかく競馬だけは、原子さんの一番弟子だと私は任じている。原子さんから教わったとおり、これからも清く正しく美しく競馬を楽しんでいきたいと思っている。

その他、いろんなことがあった。なぐって原子さんの前歯を一本、へし折ってしまったこと。大雨の深夜、奈良から京都までタクシーを飛ばしたこと。原子さんのデカパン型の海水パンツをもらって泳いだこと（これは今でも持っている）、などなど。そうした思い出のすべてを大事にしたい。

それに原子さんは、けっこうバランス感覚も備えていた。落ちこんだりして相談にいくと、かならずバカ酒になった。そして飲むほどに、さまざまな話を聞かせてくれた。それらが非常に適切なアドバイスだったことは言うまでもない。それももう、できなくなったのだ。とにかく失うものが大きすぎる。合掌。

原子さんの寝顔

丹野 正
弘前大学

「おまえの兄が乗って行ったトラックがひっくり返って、彼はいま病院で死にかけているぞ。」

たまたまキゴマの警察署の前を歩いて通りかかったとき、警官に呼び止められて突然こう知らされた。すぐ病院に駆けつけ病室を探した。ベッドがずらりと左右に並んでいる大きな病室の、左側なかほどのベッドに原子さんはいた。首まですっぽりシーツをかけられ、顔中にガーゼを貼りつけられて寝ていた。いまだに目が覚めないのだという。シーツをそっともち上げて見た。体中が傷だらけで、それらをでかいガーゼや脱脂綿のかたまりが被っていた。原子さんは大きな寝息をかいているだけだった。

僕ら2人は、ナイロビからイトウリの森まで小型ジープを駆ってのサファリ中だった。タンガニーカ湖畔のキゴマまであと90kmほどに達したところで、ジープは道路わきの土手に衝突し横転した。目を開けると、両目のまえを血が雨だれのように落ちている。眉毛の下が左右に切れたのだった。原子さんが応急処置をしてくれた。ジープはスプリングが折れたほかあちこちが壊れていた。2人は通りかかった車に乗せてもらい、そこから最も近い診療所へ行った。そこで僕の傷を縫ってもらったのだが、目をつむっている僕に原子さんは、「医者が馬の皮を縫うような針と糸をもってきたぞ」と言う。そして彼は、医師にもっと小さな針はないのですかとたずねた。次には、「今度は内蔵手術用の小さな針をもってきたぞ。あんな小さな針で縫えるのかな」と言う。「原子さんはもともと（いまも？）外科医なんだから、原子さんが縫ってよ」と僕は目をつむったまま頼んだ。彼は医師にその旨を話したうえで、僕の傷を縫合してくれた。「何年も

ずっとやってなかったから、手が振るえちゃうよ。中ぐらいの針があればいいのに」と言いながら、外科医原子先生が直接手当てした最後の患者は、このときの僕だった。そこから再び車を頼んで、夜キゴマにたどり着き、翌朝原子さんは、路上に放置したジープをガレージまで運んで修理してもらうため、キゴマから北方に向かうトラックの荷台に、多数の人たちと一緒に乗って出かけたのだった。大病室のベッドに横たわっている負傷者たちは、このトラックに乗り合わせた人たちだった。トラックはトウモロコシの袋を満載していたので荷が重く、下り坂でできるだけ加速して、その余勢で上り坂を途中まで駆けあがることをくり返していたという。そして何度目かの長い下り坂で加速し過ぎてコントロール不能になり、道路をはずれて原野に突っこみ、トラックは数回転したらしい。荷台からふっ飛んだ乗客たちは地面にたた

きつけられて転がった。そのうえ原子さんはトウモロコシの重い袋の下になっていたとのことだった。

僕自身もほとんど目が隠れるように頭に包帯を巻いた姿で、原子さんのベッド横のイスに坐っていた。長い長い時間がすぎて、ようやく原子さんは目を開けた。意識が回復したのだ。小声ながら話すこともできた。ほっとした。彼が死ぬことはないのだと確信した。そのあとも長い病院での日々と、キゴマのホテル暮らしと、ブカブ近くのリウイロまでの旅行をわれわれは共にした。

それから20年経った。今回も突然、原子さんが死にそうだという知らせを受けた。そして今回は、その日のうちに、彼が亡くなったという知らせも。弘前から東京に駆けつけたけれど、彼はもう目を開けなかった。ほえんでいる寝顔が、よけいに悲しかった。

原子さんがジーンズを着ていた頃

市川 光雄

京都大学アフリカ地域研究資料センター

原子さんは、昭和45年、私が京都大学の4回生の時に自然人類学研究室に赴任された。ちょうど大学も落ちつきはじめて、学生や教官がもどおりの研究や勉学に戻り始めた頃である。私もその頃、自分の専門として人類学を選ぶことに決めつつあった。ある日、4回生対象の人類学セミナーに出ると、見慣れない人がきていた。学生というには年をとりすぎている。かといって、教官というには、威厳がないというか、もっさりした感じである。それに、服装があまりに地味で、明るい表情に比べると何となくアンバランスな印象を受けた。ゼミを担当していた伊谷さんが鎌形赤血球に関する医学的な知見をおずおずと尋ねる。原子さんは、「血球の中にですな、マラリアの原虫さんがお入りになって...」と、あの独特な原子節で要領の得ない答をしていた。私はてっきり、この人は医学関係の研修員か何かだろうと思った。その時、原子さんは、後ほどご本人が表現していたように、「どぶで煮しめたような」色の背広をきて、やたらにタバコを吹かしていた。何やら怪しげな感じで、いったい年をとっているのか、若いのか、量りかねるようなところがあった。しかし私自身が当時は、旅館で住み込みの

バイトなどをしながら暮らしていて、大学の研究室界隈の住人を斜めに見ているようなところがあったので、この一種の韜晦を感じさせる原子さんに惹かれて、何度か人類学のことについて教えを乞いにいった。原子さんはいつも「どぶネズミ色の背広」を着て、たいていは机の上に足を投げ出して、2、3年前に出版されたターンプルの「Wayward Servants」などの英語の本を読んでいた。人類学の面白さ、とくにマリノフスキーやラドクリフ・ブラウンなどの古典的な民族誌の重要さと面白さについて教えてくれた。こちらがあまり理屈っぽいことを言う顔をしかめていたが、それでもよく無知な学生の相手をしてくれた。私が大学院に入ってから、生態人類学を学ぼうと思ったのも、また沖縄を最初のフィールドに選んだのも、原子さんの影響が強かった。

大学院に入ってから、私もご多聞にもれず飲み連れに連れてってもらった。研究のことだけでなく、人生や読書のことなどを話したが、服装のこともよく話題にのぼった。「原子さんは若くみえるけど、服装が地味ですよ」と言うと、「そんなら君の服装は何や」と逆襲され、それをきっかけにして周囲の人や街を歩く人の服装の論議が始まった。着古したセーターやよれよれの上着をまとったわれわれが口角泡を飛ばして他人のファッションの品定めをしている図は、さぞかし滑稽であったにちがいない。もっとも、原子さんも私たちも、もっぱら他人の服装の論評ばかりで、自身は相も変わらぬ「どぶネズミ色」だ

った。

一時期、原子さんが非常に派手な格好をしていたことがある。イトウリの森から帰って半年ほどたった頃で、おそらく背景には優秀な女性のコーディネーターの存在があったのだろう。赤いタートル・ネックのセーターに洗いざらしのジーンズの上下を着てあらわれた。原子さんは、地味な服装の時も「味」があったが、この格好は大きな体によく似合っていて、ひときわ若くみえた。ある飲み屋では、「テレビ関係の方ですか」と言われて、一緒にいた私たちまで機嫌がよくなったことを覚えている。そして相変わらず、「どぶネズミ色」の院生たちを伴って飲み歩いていて、近衛通りにオスカーというスナックがあって、そのママとバイトで来ていた3人の女学生を目当てに通ったのもこの頃のことである。百万遍近くの太洋軒で夕飯を食い、研究室に戻ってひと休みしてか

ら、オスカーに繰り出し、最後はその女の子たちを連れ出して飛鳥井町のミックに行き行って踊る、というのが当時の典型的なコースであった。オスカーの女の子の中にひとり私の好みの女性がいた。それを原子さんに告げると、「よし。じゃあ、これから行こう」といって、また繰り出すことになる。しかし、そういう時にはたいてい後悔することになった。原子さんがひとりで女の子を独占していて、なかなかこちらに出番がまわってこないのである。ときどき思い出したように、「市川というのは、馬鹿な男でねえ」と言いながら、誘いをかけるようにこちらを振り向く。残念ながら、女の子はたいしてのってこなかった。私は、絶好調の原子さんの、赤いセーターに包まれた大きな背中を見ながら、一瞬、敵意を感じたが、まもなく「この人にはとてもかなわない」と悲しい気持ちになった。

原子先生との遭遇

松井 健

東京大学東洋文化研究所

原子先生との、初めての遭遇は、忘れることができない。1972年、当時四回生の私は、大学院の入試の合格発表のあと、いよいよ、大学院生として過ごすことになる。京大理学部の人類学研究室の建物の二階に上っていった。なにか、昨日までとは違う感じがしたのは、その日から始まるであろう日々への期待感のゆえであっただろう。もう夕方、二階のゼミ室には、原子先生と一年先輩の院生のI氏の二人しかおらず、うす暗かった。I氏は、黒板に大きな花のような図をかいて、何やら原子先生に説明していた。新入りの私は、すこし離れた椅子に腰かけて、二人のやりとりを聞くことにした。

I氏は、説明する。昨夜、深酒をして、今朝便所にいった脱糞したところが、肛門がすごく痛い。それで、鏡に映してみると、肛門がこんなふうになっている……(明晰に記憶しているが、もう書かないことにする)。ゼミ室の机に脚を投げ出していた原子先生は、そのI氏の説明を聞き終えると、ゆっくりと、口を開いた。「それは、立派な痔ですワ」。私は、ショック以上に驚倒して、これからこの研究室に何年かを大学院生として過ごすことへの期待感が一挙に消し飛んでしまう気がしたものだ。しかし、I氏のはにかみがちの露悪趣味とともに、原

子先生のきわだった生きるスタイルにも、やがて親しみを感じ、とうとう、これだけにはなじまないようにしたいと心しつつも、つい、原子先生風の話し方に染まっていったものだった。

原子先生の人類学についてのテイストは、まさに、人とのつきあい方、話し方、酒の飲み方といった、具体的な生活すべての局面に具現されていて、それはひとつのライフ・スタイルになっていた。特講での大学院生向けの授業内容(それは、生意気盛りの私には、大抵、とても退屈なものだった)、生業中心のきわめて個別具体的な調査といった学問的傾向は、まったくそのままに、競馬のウマの見分け方や飲み屋の選び方にまで一貫して認められた。そして、原子先生は、この卓越したまねのできない生き方を通して、私のように理論や理屈が先行する学生に、全然別のところに人類学的なものの中心的主題があるのだということを示されたのであった(と、最近になって、ようやくわかってきた)。

生態人類学が生業の定量的研究へ偏向していたときには、原子先生をその体現者とみなして、私は強く批判的だったが、原子先生にとっては、むしろ、それはどうでもよいことだったように思われる。もっとも、私は、今の勤務先が地域研究を旗印にする傾向を嫌って、いまだに、個別的な地域研究が一般的な理論研究へ寄与しないなら、そして、現在の研究体制や学問体系を一度崩して再構成できないのなら、あまり意味がないなどと、やはり生意気なことを口走っているのだが。

久高島と原子さん

寺嶋 秀明
神戸学院大学

原子さんがはじめてのアフリカ調査から帰ってきたのが、ちょうど私が大学院に入った年、1973年の秋であった。私は沖縄の久高島で漁労活動の調査をしていたが、原子さんには次の年の冬いっしょに久高に来てもらった。その後原子さんは何回か、私と一緒に、あるいはひとりで久高島を訪れている。沖縄はその独特の時間の流れがある。小さな離島の久高はさらに世間と隔絶した世界であった。しかし、その沖縄でさえも、時間を超越した原子さんよりはだいぶ進んでいた。

久高島で原子さんはふたつ、先端的な商品を知ることになった。本土よりもずっと西に位置しているため、沖縄の朝はちょっと遅い。朝寝坊を得意とする原子さんと私は、連日8時ころまで布団に入っていた。私たちの泊まっていた宿のオーバーはたいへん気のよいひとであったが、料理はあまり得意ではなかったと思う。オーバー得意のヘチマ汁は、庭にたくさんぶら下がっているヘチマをぶつ切りにして、これでもかというほど汁に放り込んだ豪快なものであった。朝食にもときどき私たちのびっくりするものがでてきた。

ある朝「寺嶋君、これはどうするの」と原子さんののんびりした声。宿のオーバーは神役（久高の祭司組織のいろいろな役職）の仕事が当たっていたため、朝早くからどこかへ出かけていった。何かと思って茶の間にゆくと、お膳の上に炊飯器とカップ麺がのっている。沖縄製の「オキコヌードル」であった。原子さんがカップ麺を手にして茫然としている。私はおもむろにヤカンで湯をわかし、カップのふたを開けて湯を注ぐ。「おや、まあ」と目を見はる原子さん。原子さんはこのときはじめてカップ麺というものをしたのである。そのころには「焼きそば UFO」まで発売されており、カップ麺をしらない人は原子さん以外にはいなかったのではないか。また別の日の朝、「寺嶋君、ちょっと」とお呼びがかかる。今度原子さんが手にしているのはボンカレーの袋。これもどうしたらよいかわからないようす。はさみで袋を切って、皿にもったご飯にかけてあげる。温めたかどうかは記憶がない。もしかしたらそのまま開封してご飯にかけただけかもしれない。こうして原子さんはボンカレーの食べ方をしたのである。「沖縄に来ると勉強になるわ」と感心していた原子さんであった。

内間長一さんは久高随一の漁師であった。うまい具合に長一さんの家は、私たちの泊まっていたイキヤーの真向にあった。夕方、宿でごろごろしていると、当時4歳であった長一さんの末娘のミカちゃんがやってきて「オトーが呼んでるよ」という。もう何日もつづけて宿では夕食を食べていない。「オバさん、今日も夕飯はいいからね」とちょっとすまない気持ちでいうと、「いいよ、いってらっしゃいよ」とオーバーがテレビを見ながら平然と返事する。長一さんの家にゆくと、さっそくその日の漁の成果である海の幸を着に泡盛を飲みはじめる。夕方からはじめてえんえん、真夜中の12時をまわるまで宴席はつづく。その間、島の漁師仲間が入れ替わり立ち替わり顔を出して泡盛をくみかわす。原子さんは10時を過ぎるころにはこっくりこっくり船をこぎ出すのが常であった。しかし、突然目覚めては、「それはちがうよ、長一さん」といって漁師に海の講義をはじめたりする。しかしそういわれても長一さんは気を悪くしない。原子さんがただの人ではないことをよく知っていたからである。

じつは原子さんは、「ウミンチュ（漁師）でも、こんなひとはいないよ」と長一さんにいわれるような業績をいろいろ残している。そのひとつは、冬の高から特大のコブシメを「拾って」きたこと。なんでも、12月のある日、浜のすぐ前にあったサンゴ礁のまわりを泳いでいたところ、なにやら不思議な物体がサンゴに頭を突っ込んでいるのを見つけたそうだ。もぐってみるとこれがコブシメという大きなイカであった。もちろん生きている。まさか、と思いつつ手を伸ばして触ってみても逃げるようすもない。そこで半信半疑のまま、そっとかかえるようにして海からあがってきたのだそうだ。まるで原子さんに一身を捧げたようなコブシメの最後である。

またあるときは大きなヤコウガイをとって海からあがってきた。これもたいてい深いところにいる貝であり、漁師たちはダイバーといって、潜水器具をつけてもぐって採集する。それを原子さんは、浅いリーフのなかをぶらぶら泳ぎながらとってきたのである。背が立つようなところにいたという。これもまるで、原子さんにとられるべくしてリーフの浅瀬にまで上ってきたとしか考えられない。「ほんとにめずらしいね～、こんなことはないよ」と長一さんは思い出しは感嘆する。

西表島ではやはり自殺志願の大イセエビが、潜っている原子さんの目の前に出てきたそうだ。どうにも原子さんは、沖縄の海に愛されたという以外にないのである。

わが心の師 原子令三先生へ

内藤 俊一
琢建築構造設計

私と原子先生との出会いは1966年先生がまだ東大の大学院におられた頃で、30年のお付き合いと言う事になります。それも遊びのみのお付き合いで、晩年はゴルフ・酒・マージャン・競馬・ビリヤードと多岐に渡っておりました。その遊びの楽しみ方はまさに達人の域に至っていたと言えました。本人が楽しんで周りも楽しませると言う方でした。とにかく原子節と言われる独特の話術は天下第一品で抱腹絶倒の連続で、楽しい夜々を過ごさせていただいた事は終生忘れることはできません。又笑いの中に先生独特の鋭い観察眼を持って森羅万象を観ておられたことが、うかがい知れる方でした。それが周囲の人々に敬愛され、大きな影響を与えたのではないかと考えております。

先生は酒と花鳥風月、それに人間の善良さを愛した人でした。そして我々凡人が思いなやむ社会的約束事を超

越した、高い視点でしかも素直にものを見て、瞬時に真髓を見抜く天才でした。その為傍若無人と思える行動も、皆原子なら仕方がないと納得させる魅力を持っておりました。

かつて先生に「我慢とか努力とかしたことがある？」と尋ねたことがありましたがその時先生は「ウーン 一度もない」と答えられました。今思うと我々と違う次元の努力をなさっていたのだと納得できます。

先生の葬儀に出席して、私はこれ程惜しい葬式があるとは思いませんでした。唯私自身、死ぬ楽しみが出来た様に思います。だってあの世で又先生と遊べると思うからです。

先生の最後も又見事なものでした。なくなる2日前、医者である本人は当然承知していたことで、「お先に失礼します」と見舞に行った家内に言ったそうです。なぜか、憂えず泰然として死を迎えた先生の美学は驚嘆するばかりでした。

どうぞあの世から我々の今を視て下さい。ご冥福を祈ります。

原子令三さんが愛したもの

安溪 遊地
山口県立大学

私が進学したところの自然人類学(京大理)の研究室では、ゼミが終わると「さあ、行こうぜ」という声がかかり、どやどやと近くの呑み屋に繰り込むことが多かった。助手の原子さんがアフリカのイツリの森から帰ってくると、「呑み方の指導」の頻度がぐっと増えた。酒の席での原子さんは、フィールドでのさまざまなエピソードを語って聞かせてくれた。おかしな失敗談を語る彼のまわりには、いつも暖かさや楽しさがあった。春は北野神社で花見、初夏は山菜採り、フィールドにでかける人が増える季節をはさんで、冬には川端の赤垣屋で琵琶湖の鮒ずしを試したり、外国のお客さんのために鯨を注文したりした。ところがはじめのうち、日常的に呑みに行く分には、院生はほとんど金を払わないでよかったのである。これは、独身貴族の原子さんの貢献も大きかったのだろうと想像しているのであるが、ある時、毎月の呑み屋からの請求書の額にたまげた伊谷純一郎先生の鶴のひと声で、この習慣はあえなく廃止になった。

自分のこと以外には何事にも寛容な原子さんに一度だけ叱られた記憶がある。ある時、私は研究室のコンパの会場選びをまかされた。それがどれほど重要な任務であったかを認識していなかった私に、原子さんはうんざりした顔でこう言った。「どこでもいいんでしょ、という投げやりな選び方だけはやめてほしい。」原子さんは、そうした酒の席の雰囲気は何よりも大切にしていたのである。

私のはじめてのフィールドワークは、西表島の廃村調査だった。伊谷先生と原子さんが同行して、山や海の歩き方、キャンプ生活の仕方を指導して下さった。原子さんは、藪の中がダニやツツガムシの巣窟であることを知っていたのか「君は山幸、僕は海幸」といって、村の跡には興味を示さず、魚たちの湧く海に潜ってゴシキエビを突いてくれた。沈没船の所で泳いでいて急に姿が見えなくなった原子さんが、船の中に入って出られなくなったのではないかと、いって伊谷先生が青くなって探しておられたのも、なつかしいひとこまである。

アフリカに行く前には、スワヒリ語の手ほどきを受けた。原子さんが講師で、教科書のスワヒリ語のようなややこしい変化がない、ザイルのスワヒリ語を使うことができる幸せについて、ゆるゆると教えてもらった。「土がどろどろだ、というのを、タンザニアのスワヒリ語で

はマトベ・ニ・ライニ・サーナというんだけど、ザイールではポトポト・イコ・テケテケ・カビッサというんだなあ、感じ出てるでしょ。」2つのスワヒリ語のバイリンガルを目指して、ケニアのムアンギさんのスワヒリ語の中級(!)クラスにも通っていた私は、宿題を持ち帰っては質問を連発し、原子さんを苦しめた。

「今度は、3か月だけだから」といって出かけて行ったザイールで、原子さんは交通事故に遭う。荷台に綿とドラム缶と人を満載した大型トラックが横転して、ドラム缶の下敷になった人々は死に、綿の下になった人々は九死に一生を得た。原子さんは綿の下敷になり、あちこちの骨が折れた。京都に帰ってきた原子さんは、再手術のために入院。不満は、病院の食べ物のことである。「6時間のうちに3回食べるんだぜ、夜もつと思う?」私は、畑中幸子さんからの差し入れの寿司を届けたこともあったが、ことに喜ばれたのは、妻が作った氷頭(ひず)なますだった。「僕の郷里では、単になますといえればこれの

ことだよ」といって、原子さんは顔をほころばせた。研究室から山へ遠足に行った時、われわれ院生は甘いヤマホウシの実をほうばって、口の中がイガイガになったのだが、原子さんはそうした“レベルの低い”食べ物には食指を動かさなかった。そういえば、最後にじっくりお話しした時のことが思い出される。放送大学の「アフリカ論」の収録の相談のあと、酒を御馳走になった時、私はホタテの貝柱を注文して「美味しいよ」と言ったのだが、原子さんは「あ、僕はいい、それを食べようとは思わない」とだけ言った。津軽育ちの原子さんには、むつ湾から東京まで運ばれてきた冷凍の養殖ホタテなどを食べる気にはどうもいねなかつたのだろうな、と今にして思いあたるのである。原子さんは、自由と本物を愛した。原子さんは、頑固さをしなやかさに包みこむすべを私に教えようとしてくれた。あのにこやかな温顔が今も思い出されてならない。

ケニアの原子さんと私

今井 一郎
弘前大学人文学部

私がアフリカ大陸の自然と人びとの暮らしの初めて触れたのは、1980年北ケニアのラクダ牧畜民ガブラ調査の際原子令三さんとご一緒したときである。私が原子さんと行動をともした期間は3カ月にも満たなかったが、そのときの彼の姿は、ガブラランドの自然と人とともに今だに私の胸に焼き付いている。今ナイロビで彼の計に接し思い起こすと、チャルビ砂漠の中でオラ(ガブラのメインキャンプ)の木陰にどっかと腰を下ろし、人びとと語り合っただけ高笑いするいかにも楽しそうな笑顔が生き生きとまぶたに蘇ってくるのである。

当時私は京大霊長研の院生で、原子さんの名前はよく耳にしていたが、日頃自然人類学教室に出入りする機会がなく、彼と親しく言葉を交した経験も少なかった。原子さんも、ザイールの湿潤な森とは対照的な乾燥砂漠という不慣れな環境の中にアフリカが未経験の大学院生を伴うことに、若干の戸惑いがあったかもしれない。しかし、彼は私たちの調査許可が下りるのをナイロビで待つ間から、私に対して様々な点で気を遣って下さった。

はじめ私たちはナイロビ、インターナショナル・カジノの裏手にあったアインスワース・ホテルに滞在してい

た。原子さんはスワヒリ語が全く使えない私を見かねたのであろう。ある時「毎日10分ずつスワヒリ語を教えようか。」と提案してくれた。それからホテルの部屋や中庭で“Simplified Swahili”をテキストにした朝食後のスワヒリ語講座が始まった。彼は「基本をみっちり指導するから、それを実地で応用すればすぐ上達する」と言っていて、機会をとらえては私をナイロビのプレイスポットに連れて行ってくれた。ナイトクラブでも「おや、あの娘(こ)は君に気があるみたいだよ。そばに行ってお話ししてきたら?」という具合に私の尻を叩くのである。しかし、申し訳ないことにフィールドに入ってから私の会話能力はスワヒリ語、ボラナ語どちらも一向に進歩しなかった。

約3週間後、念願の調査許可証を手にした私たちはキャンパス・トップのランド・ローバーで北に向かい、マルサビーツから先は積み重なるラーバ(溶岩)の間を縫ってチャルビ砂漠へ降りていったのである。始めのうち、私はどのように調査を進めたらいいのか皆目見当がつかなかった。心の中には、何について調べたらいいのか原子さんがアドバイスしてくれるのではないかと、という甘えもあった。ところが彼はナイロビにいるときから、「僕も牧畜民の調査が初めてだから何をどうやってしらべたらいいのかよくわからないんだ。調査の内容と方法は君の好きなようにやればいいよ。」と言って私を指導する態度をとらなかった。

私は原子さんから肩透かしを食わされたように感じた

が、やがて開き直り自分だけで調査項目を考えることにした。具体的にどんな調査をするかが2人の間で話題になることはほとんどなかった。私は家畜管理術の解明に焦点をしぼることにした。毎日金魚の糞のように牧童に従って歩き回り、乳絞みや水汲みなどを手伝ったのである。夕方キャンプに戻ると『莊子-内篇』を開いて疲れを癒した。一方の原子さんはほとんど動こうとはしなかった。彼は朝から「暑い!暑い!」を連発し、毎日キャンプのはずれに生えていたアカシアの木陰で本を片手に座り込んでいることが多かった。彼の座右の書は『易経』だったように記憶している。やがて彼のそばに誰かが近づき話がはずんでくると、体を揺すって笑う姿が遠目にもわかった。彼はよく「ピグミーちゃんの調査の時もこうだった」と言うのだった。「こうしてじっとしていれば、そのうちに必ず人がやってくるんだ。結構色々なことがわかるよ。」そして後から2人で食事をしながら話の内

容を聞かせてくれた。

「ゴダーナ爺さんは脚が痛いというが、ワタ(ガブラの近隣に居住する家畜を持たない民族)の医者が着て脚を切開して悪い血を出したら中からラダッチ(アカシアのとげ)が出てきたんだ。どんな病気でも身体の中にラダッチが入っていたことが原因にされるみたいだよ。」

「グヨー・ワリオ(仮名)はずっと腰が悪いから、誰か他の男が代わりに奥さんと寝て子供を作ったんだ。ローバ(仮名)がそうだ。あの子はグヨーの息子として育つんだが、本当の父親は誰だと思う?フフフ…」

原子さんはフィールドで出会う人たちといつもなごやかに言葉を交していたので、私もつられて口元がほぐれ次第に調査のペースをつかむことを覚えていった。彼の帰国後も、私は常に彼の一挙動を思い出して行動した。ケニアで私の導師となって下さった原子さんのご逝去を心から悼みたい。

1970年12月18日

渡辺 毅
梶山女学園大学

豊増が逝き、原子さんが去った。次は俺、との思いに波立つ心を鎮めきれないでいる。逝くのを恐がっているのではない。荻窪での葬儀の後、後輩たちと新宿で精進落としをし、西田正規君、佐藤俊君夫婦と4人で八重洲の飲み屋に腰を落ちつけた。痛飲した。ひたすら原子さんを偲んで飲んだ。気がつくとも新幹線のなかだった。静岡あたりで車掌に起こされ、グリーン車から自由席に移動し、変わらず名古屋で下車した。駅前の縄のれんの店で、また飲んだ。原子さんの分も注文した。周りの喧噪は消え、虚空に話しかけながらボロボロ泣いた。一瞬、原子さんに誘われたような気がした。恐くはなかった。

以前に、両親を偲んで書いたことがある。「……どうして親父と飲んだ日付をはっきり憶えているかと言えば、その日が給料日だったし、親父を送った後僕は京都へ行き、次の日親友の原子さん(現明治大学教授)と大酒を飲んで交通事故を起こし、京都の病院に入院するという思い出をとまなっているからだ。一歩間違えば死んでいた。親より先に逝くという人生最大の親不孝を犯すところだった。けがは幸いなことに軽傷ですんだが、紙一重の死に直面したのに、死への恐怖心はほとんど感じなかった。酔いのせいもあろうし、身近な青年の死(大学闘争とか内ゲバによる)がありふれていたせいかもしれ

ない。……」(私家版「宮東の記」渡辺賢発行)。そうなのだ。1970年12月18日の深夜、私と原子さんは、京都丸太町通裁判所前の歩道の標識棒に、赤いパブリカで激突したのだった。

いつの頃からか、死というものをさほど恐がらなくなった。昨秋もそうだった。女子大に勤務して10年、初めてケースメソッド(他大学のゼミに相当)の時間に穴を開けた。ほとんど死にかけ、といった状態だった。しかし、学生と話していて、今は死ねないと思いついた。1週間酒を断った。かろうじて此岸に踏みとどまった。わたしには、豊増と原子さんの「おもかげ」を後世に残す務めが負わされている。機会あるごとに、「おもかげ」を記していこう。今回は原子さんとの最も鮮烈な思い出の、1970年12月18日について記録しておこう。あの事故の当事者は、わたししか残されていないのだ。

12月18日午後、自然人類学研究室を訪れた。ゼミの日だったような気がするけど、定かではない。夕方、池田先生から「原子君の歓迎ということではちょっと飲むか?」と誘いがかかった。三人で百万遍「上海」にいった。調子よく飲んでいたところに、泉拓良君が友人たちとやってきた。この秋、泉靖一先生が突然に、彼岸に旅立たれてしまっていたのだ。急遽、拓良君の慰め会にしようということになり、友人たちを送って引き返してきた拓良を交え、四人で泉先生を偲んで飲んだ。心身ともに疲れていた拓良が帰るというので、9時頃お開きにして、すぐに「フサちゃん」のところへいこうと思っていた。が「自宅で飲み直そう」との池田先生の言に、原子さんの

車で熊野の官舎を訪ねたのだった。

池田先生のお宅の敷居は、わたしにとって少し高かったのだが、酔った勢いで話がはずみ、やがて議論になった。議論の内容はおくとして、原子さんとわたしは「勝った！勝った！」と気炎をあげて先生宅を後にした。帰りがけ、玄関で先生にわたしは呼び止められ、「原子に運転させるなよ！」とくぎを差された。「はい、わかりました」と答え、階段をかけおりた。外に出た。原子さんと並んで立ち小便をした。その瞬間から記憶が途絶えている。

後で、原子さんに聞いたところ、官舎の構内で車をバックさせたとき、建物にぶつけ、丸太町通りを「フサちゃん」の店へと西進したのだが、まるで宙を飛んでいるような気分で、河原町通りをどうして横切ったか記憶になく、眼前に電停のブロックが迫って左ハンドルを切り、そのまま歩道に乗り上げた由。事故写真によると、交通標識の棒がボンネットの中程までメリ込んでいた。フロントガラスは粉々になり、顔に刺さり、眼にも入っ

た。「おっ、生きとるで！」と外からのぞき込んだ野次馬の声で、気が付いた。救急車で四条外科病院に運び込まれた。わたしは、「眼が痛い！」とわめいていたが、原子さんは冷静だった。縫合針の切れが悪いから取り替えろと、医者に文句を言っていた。警察の聴取が始まった。わたしは、誰が見ても泥酔状態だったが、原子さんは、飲んでいませんと答えていた。

「息を吐いてみろ！」

「フー」

「あれ！飲んどらん」

パブリカを入手してから40日。飲まない日はなく、日頃から鍛錬していたとのこと。「一度深呼吸してから、肺の空気を全部出す。次の吸気は肺に入れず、口に含む。このとき口腔内の毛細血管をぎゅっと締める。これがポイントだ。あとは口に含んだ空気を吹けばいい。」事故は、わき見運転で処理された。

小浜島と台風と原子さん

武田 淳
佐賀大学農学部

大学院に入ったころから西日本の漁村の予備調査を兼ねた旅を原子さんとよくした。その一つに南西諸島の沖繩行があった。

1973年の夏に八重山・石垣島を拠点に離島を見て回り、ある日、小浜島に渡った。糸満系漁師たちが寄留してできた集落である細崎（くばざき）の港まで、炎天下、一時間ほど歩いた。まばゆいばかりのサンゴ礁の海の向こうには西表島が見えた。坂を下りきったところで真っ黒に日焼けし、愛想のいい二人のオバサンに出会った。大城「テルコ」オバーと金城「ウメ」オバーであることがあとでわかった。なんとも南洋的な集落の景観に加えて、島の女たちもまた、大柄で肥ったパンツ系のマーケットマミーのような「テルコ」さんとピグミーのように小柄な「ウメ」さんとの度肝を抜かれた出会いにはなぜか心が休まる思いがした。早速、われわれは金城さんの家の一部屋をあてがわれ、細崎での生活が始まった。テルコさんはシンガポール生まれで旦那の大城次七郎さんとは戦前、現地で結ばれた。彼は眉毛が濃く太く、ヘラクレスのような筋骨隆々たるタコ捕り名人であった。

彼が帆を張った小さなサバニに乗って採ってくるタコをオバーがほとんど連日、石垣に行って売ってくる。ウメさんの旦那「ブジャ」は片目がつぶれ、奥さんと一緒に刺し網で魚をとっての生業だ。

われわれは、連日ほとんど具のない沖繩ソバだけを朝な夕なに食べさせられ、ブジャのサバニで漁の手伝いに出かけていた。テルコさんは、石垣で買ってきた肉と野菜をふんだんに使った料理をわれわれにご馳走してくれる。子どもに恵まれない夫婦は、客人をわが子のように大切にしてくれた。

しかしウミンチュ顔負けの潜り手であった原子さんには、サシアミ漁は退屈で飽きたらなくなってきたのだろう。追い込み漁にイトマンチュの醜態味を感じていたからである。

それからすぐに小浜島での生活を切り上げて鳩間島に移動した。島の区長さんの家に身を寄せた最初の晩に私と原子さんは最大瞬間風速が80メートルというばかりの台風に遭遇した。夜半、区長さんとわれわれは家の縁側に立って雨戸を押さえつけた。何とか雨戸を吹き飛ばされないですんだものの、村は壊滅的な被害をうけていた。午後には島の被害状況を報告に出かけるサバニにわれわれも便乗して、まだ波のしけている海を石垣まで出かけた。数日後、小浜島の様子も見に出かけてみた。家の周囲を細い竹や小枝で垣根で仕切っただけの開放的な集落は見る影もなかった。政府の家と称する殺風景なブ

レハブだけが立ち並び、かつてのニワトリ、アヒル、ブタが、家の回りを走り回っていた南国の世界は消え失くなっていった。

しかし、その小浜島では心美しいウミンチュの方々と知り合えた。その一人に大城満太郎氏（故人）がいる。彼は大城兄弟の末子として大正15年に小浜島で生まれた。カツオ漁の餌捕りを仕切ったり、当時、もっとも勘と腕の良い潜りの名手であった。海と魚を知悉した満太郎さんは、感心したように原子さんの潜りを絶賛し、黒島や新城島などの八重山の海の素晴らしさを教えてくれた。満太郎さんは勇敢なイトマンチュの血をひく漁師だったのである。

琉球大学の加納隆至氏に続いて1974年に沖縄に職を得た小生、そしてその翌年に赴任した佐藤弘明氏のもとには毎年夏ともなれば、渡り鳥のように間違いなく原子

さんは沖縄へと飛来してくるのだった。

久茂地の専売公社の店で買い込んだピースが原子さんの沖縄滞在の原動力であった。沖縄にやってくる仲間から集めた募金で購入したグラスボートを車の屋根に縛り、沖縄本島や離島へと遠出した。捕ってくる魚をさばいたり、料理するのはもっぱら小生の仕事であることが多かった。

その後、ある年から原子さんの沖縄詣がびたっと止まった。海が哭いているような赤土に汚染された海。白骨のようになってしまったサンゴの死骸。そんな沖縄の海の破壊されていく様子など見たくなかったのだろう。

海の子「原子さん」、あの世でも、短パン姿でサンダルを履いたいつものスタイルでもっともっと美しい海と心優しい人々をきっと探しておられるのでしょうか。さようなら。

原子さんのこと

葭田 光三
日本大学文理学部

原子さんが亡くなった。あの不死身の原子さんが、私よりも長生きするはずであったのに。原子さんが外科医をやめ、人類学を志して東大人類学教室に入室したのは、昭和40年頃であったと記憶している。医学部出身で、しかも何年か外科医として勤務していたにもかかわらず、研究生としての出発であった（その後、博士課程に入学）。丁度、4年生であった私たちの学年の講義を受けていた関係で、また、岡田さんの紹介で岡田さんと同じ荻窪の渡辺さん宅へ下宿し同じ中央線ということで、授業が終わるとよく飲み連れていってもらった。私にとって原子さんは酒の師匠であった。それまでの私の飲み方と云えば、6時から10時頃までで酒量もせいぜいビール2本に、オンザロック1-2杯という程度であったが、原子さんの飲みっぷりはまことに見事で、最初のオンザロックを殆ど10秒いや5秒以内にカラカラと氷の音を立てて飲み干し、後も推して知るべしという飲み方であった。これは酒が強いからだけではなく、懐具合も関係するのだが、原子さんのポケットからは東北大学医学部の同級生や医局の方々からの饞別—そのころ珍しかった1万円札（これで10人ぐらい大酒が飲めたのだ!）—が手品師のように次から次へと出てきて、貧乏学生であった私などは羨望の眼差しと憧れの気持ちで原子さんに付き従ったのであった。

そのころよく行った店は荻窪のジュニア（その後珠仁屋—現在は閉店）という店で、文学者や出版関係者などの溜まり場であったが、原子さんがいついてから様々な人が訪れるようになり、朝まで喧々囂々の議論がなされたり、歌や踊りで夜が明けるなど、また、原子さんが京都に行ってからであるが、2階に泊まれるという、とにかく奇妙でありがたい店であった。その当時のお客とは現在もつきあいがあり、琢建築構造設計の内藤さんやクリエーターの上吉さんもその当時からのつきあいで、原子さんの飲み仲間、ゴルフ仲間、遊び仲間であった。私やその他大勢の偉大なスポンサーであった原子さんの地位は、無尽蔵かと思えた饞別も1年ぐらいで底をついていたが、その後しばらくは続いた。それは原子さんが昔とった杵柄の医業でバイトしてくれたからである。しかし、それは長くは続かなかった。バイト先（知人の外科医院）が千葉県の中野競馬場の近くであり、土曜日の夜勤のあとバイト代のほとんどをそこで費やすことになってしまったからである。原子さんの競馬との付き合いはこのときから終生続いた。「その内当てたらパーっと」という原子さんの言葉を信じて、長々と続く「競馬評論とはずれ談義」を辛抱強く聞いていた私を今でも褒めてやりたい。

その後、原子さんは近藤先生とアンデスで調査。まだ泊まれなかったジュニア時代であったので、飲んだ後、よく原子さんの留守宅に泊めてもらった。ある時は、岡田さんの手引きで、ある時は図々しくも、大家の渡辺さん（当時約75才）を起こしてまで、そして朝、そっと足音を忍ばせて渡辺さんがこられて（こちらは説教され

るとおもい寝床の中で小さくなっていったが)、障子の陰に何か置いて立ち去った。なんと、そこにはサンドイッチが—。そんなことが出来たのも原子さんが、稀代の”ババゴロシ”であったからであると思う(ただし、原子さんは決してオンナゴロシではない、偉大なオトゴロシである)。京都の下宿に泊めて貰ったとき、原子さんの枕元に荻窪時代と同じ光景が見られたのには、そのころ千葉館山の漁村調査で”ババゴロシ”を自認していた私も脱帽した。そこには丁寧に折り畳んだ下着(猿股)が数枚積み上げられていたのである。場所も形も殆ど同じに。こんな芸当が出来たお方は原子さんをおいて誰がよいか。荻窪では岡田さんも、京都では同じ下宿人の誰一人として一回もなかったことである。

また、原子さんは囲碁の師匠でもあった。私は不肖の弟子であったが、多くの方々に指導され、また、囲碁を通じて友達の輪が広がったことはうれしい限りであった。これはまさに原子さんのお陰であり、それは生態人類学(研究会)の前後におこなわれてきた囲碁親睦会がいつもなく原子杯と呼ばれるようになったことに象徴されている。この会は、初めは生態人類学研究会の夜に集まって囲碁を打っていたのだが、西田(利)さんが、京大に戻られるとき、研究会前日に壮行・送別会をおこなったのが契機となり、その後例会となったものである。時々だが人類学会の前後にも行うようになった。最近では鹿児島学会の後の指宿温泉(砂風呂にもいった)、弘前・高増温泉、昨年の有馬温泉と年ごとに隆盛をます原子杯である。また、昨年4月には、原子さんの還暦を小原子杯として祝った。原子さんの定年を考え、あと10年は続けなくてはと思っていた矢先の鬼籍入りであった。11月には寺嶋さんの発起で、追悼囲碁会が催された。今回の芦原でも原子杯は行われる。原子杯は生態人類学会がある限り不滅である。

学問的なことは他の人々が述べてくれると思うのであまり触れないが、原子さんを正しく評価できたのは、やはりムブティ・ピグミーの研究成果を読んだときである。別刷をいただいた頃は、解剖学を専攻していたので読む機会がなかったが、文理学部に移り人類学をやり直していたときにはじめて読んでその観察力、分析力に感服した。とくに、網猟の失敗の段は原子さんならではと思う。ただ、原子さんのあの直感力と人をうならせる表現力がそれほど見られなかったのは、実証を重んじる渡辺仁先生の影響であろうか。伊谷先生の爪の垢を飲まずとも、すばらしき直感力・表現力を持っているはずなのに、い

つの日か、そのような直感力・表現力に富んだ文章を時々有るごとをお願いしていたのだが、きっと原子さんのフィールド・ノートの中にそれは埋まっていると思う。誰か発掘を!!

ターンプルが「異文化への適応」のなかで、原子さんや丹野さんの業績を高く評価しているのを見てわがことのようにうれしく思った。ある倶楽部で、たまたまターンプルの話になり、「ターンプルの文章はすばらしいですね。Wayward Servant持ってたら貸して欲しい」というと、「あれは結構間違いがあるよ」といってそのままになってしまったことがある。そのくちぶりからは「もっとすばらしいものをそのうち書くよ」と云っているように私には思えたのだが、原子さんは理解力もずば抜けていたと思う。私は生態人類学研究会は当初はあまり参加しなかったが、1986年の雲仙あたりから殆ど毎年参加するようになった。フィールドのフレッシュな発表はもちろん魅力だが、私にとって原子さんの瞬時に本質を見抜いたコメントはそれだけで毎年参加するに値するものとなっていった。原子さんのコメントは原子さんが京都時代に様々なフィールドや自然人類学研究室での討論を経て、研磨し作り上げた成果の一表現であったと思う。また、生態人類学研究会の発足には、京都に行った原子さん、東京に行った西田さんに、何か学問的理由をつけて会う機会をつくろうとした素地があったような記憶がある(もし、間違っていたらごめんなさい)。原子・西田の交換トレードは、まさに生態人類学研究会のトリガーであったと思う。

原子さんには多くのものを教わったが、返すものはあまりなかった。有るとすれば1つだけ、潜りである。若い頃、原子さんとはしばしば旅行をしたが、伊豆の式根島に行った折り、潜りを得意とした私が原子さんを教えることになった。ところが、何度やってもうまく潜れない。良く見ると原子さんは足を水上に出したまま、必死に空中でバタ足をしていたのだ。ようやく潜れるようになったが、親潮が流れ込んで来ていたため、寒さのためダウンというありさまであった。時が経ち、沖縄の久高島では原子さんは潜りの名人(?)となっているという。私の指導がようやく役にたったと自負した次第である。

まだまだ、おもいではつきないが、こころで筆を置こう。

出会ってから約30年、兄として、様々な師として、原子さんは私の前に聳える大きな山であった。その山を失って私はいま、途方に暮れていることだけは確かである。

沖縄の原子さん

佐藤 弘明
浜松医科大学

原子さんは海が好きだった。きれいな海の沖縄が好きだった。1968年だったか、9年だったか、生態人類学者としては誰よりも早く沖縄を訪れた。原子さんが沖縄の海の話をするときはほんとうにうれしそうだった。夜光貝を潜って採ったよ、大きなコブシミを素手で採ったよ、と自慢をしても原子さんの場合は、聞く者すべてを楽しませる人だった。

1975年に私が沖縄の住人になってからもしばらくは毎年のように来沖し、加納さんや武田さんとともにあちこちの海で遊んだ。原子さんは素潜り専門だった。加納さんや私たちが釣った魚をうまいうまいと舌鼓を打ちながら、釣りは卑怯だとよく非難していた。確かに、潜りは上手だった。酔うほどにしていた獲物自慢も裏付けはあった。しかし、年々沖縄の海が荒れ、魚や貝が少なくなってくると、原子さんが手にする獲物も少なくなっていくような気がする。夜光貝やコブシミはもはや夢物語の時代になってきた。いつだったか、北部のまだそれほど荒れてはいなかった古宇利島でキャンプをしていたときのことである。小さなボートに原子さんと二人で乗って獲物を探していると、ボートの下の珊瑚礁の間

にゴシキエビを見つけた。原子さんは大きな図体に似合わぬ素早い動作で鉈を片手にさっと潜っていった。そして、狙い違わず見事にエビを刺し貫いた。大きな獲物をしとめた漁師のごとく何事もなかったかのように水面上がってきて、獲物をボートに揚げた。しかし、エビは、びくとも動かなかった。抜け殻だったのである。さすがの原子さんもエーッと絶句し、がっかりした様子だった。私もどう声をかけていいものやらわからなかった。もっともショックの回復も早く、後で、抜け殻なら誰でも突けるよと加納さんたちに冷やかされてもいっしょになって笑っていた。原子さんが夏になっても沖縄に来なくなったのは、この抜け殻事件からしばらくしてからだったように思う。いつか、また沖縄に来てくださいと言うと、原子さんはもう海が昔のようではなくなったからなあと答えた。あの夢のような石垣島や小浜島を知っている者にとっては近年の沖縄は悲しかったのかもしれない。

夏になれば、原子さんは満太郎さんたち海人と珊瑚礁の海でおもいきり漁をし、捕った魚をおかずビールを飲みつつ暮を楽しむことだろう。いつもゆったり、茫洋としていた原子さんにしては、今度だけは珍しく急ぎすぎたかもしれない。しかし、あと2~30年もすれば皆たいてい追いつく。それまでに原子さんにいい漁場を見つけておいてもらおう。そして私もこんど原子さんに会うときまでに1目は腕を上げておきたいと思う。

第8回毎日21世紀賞(1989年)

「人間と金—コイン一枚からの出会い」より

人類学者である原子令三はかつて、イトウリの森の調査したときに、一人ピグミーの独身の老人を荷物運搬人として雇ったことがある。とある小さなマーケットにたどり着いて、原子は、それまでの給金を老人に支払った。老人は、そのマーケットで手に入るあらゆる種類の食品を一通り買い集め、とうとう平らげてしまった。その夜、老人は、平らげた食べ物を間断なく吐き戻しつつ下痢を繰り返した。原子は、介抱を続けながら、つくづく、こんなにも素晴らしい金の使い方もあるのだと感心していた。

だが、それ以来、原子は、金の使い道もない不便な所でだけ給金を支払ってやった。老人は、給金を親族や知人にプレゼントして分け与えるしかなかった。それでも老人は、ずっと原子の仕事をやめようとしなかった。民族社会では、独身者の地位は、極めて低い。しかし、その老人は、原子の支払う賃金を人々に分け与えることで、何がしかの威信を獲得した。原子の仕事を続けたのはそのせいだったろうと原子はいう。しかしながら、その老人は、原子という、人をひきつけてやまない人類学者と行を共に出来ることに無常の喜びを見い出していたのだと、私は信じている。後年、原子が老人を訪ねたとき、彼はもうこの世の人ではなかった。

神奈川大学
小馬 徹

発表抄録

生態人類学会 第2回学術大会 (3月20日)

タイ東北部農村の「世帯」-生産・消費・再生産の単位に関する研究
'Household' of Agriculturists in the Northeast Thailand —A Study on the Unit of Production, Consumption, Reproduction

村山 伸子 (MURAYAMA, Nobuko)

東京大学人類生態学 (Department of Human Ecology, University of Tokyo)

Keywords: ライフサイクル, 経済発展, 資源へのアクセス (life cycle, economic development, access to resource)

タイ東北部の天水田稲作民ラオの社会の生産・消費・再生産は、これまで村落単位で捉えられてきた。しかし、実際に生産・消費・再生産の維持のために資源にアクセスする意志決定をして行動する単位は多くの場合「世帯」である。したがって人間の資源利用と生存戦略について捉えようとする場合、生産・消費・再生産を「世帯」単位で分析することが必要であると考え。そこでこれまで「世帯」を単位として横断的な比較をおこなってきたが、そこでみられた「世帯」差が家族のライフサイクルを超えた差なのか、ライフサイクルの段階が異なるために表れる差なのかを明らかにする必要性を感じてきた。一方、「世帯」という単位とその生産・消費・再生産の営みは固定的なものとしてではなく、タイ東北部の歴史的な条件の中で捉えられるべきである。そこで本研究では、「世帯」を単位とする生産・消費・再生産は、家族のライフサイクルを縦断的に見たときに変動パターンがみられるか、さらに1970年代以降のタイの急激な経済発展と人口増加にともなう自然資源の希少化の中で変化するかについて検討し、以下のような結果が得られた。

1. 家族のライフサイクルにともない、生産要素（土地、労働力）及び消費要素（世帯員数）に一定の変動パターンがみられ、結婚後15年間はリスクが高まる時期であった。

2. 経時的な変化についてみるために1969年以前、1970年代、1980年代に結婚した結婚コホート間で比較してみると、労働力の変動パターンでは変化は見られな

かったが、世帯員1人当たりの土地（耕地）面積は時代が下るにつれてどのライフサイクル段階でも少なくなっていた。世帯員数の変動パターンは結婚コホートによって異なり、時代が下るにつれて結婚後数年同居した後、独立とともに世帯員が減少しその後15年間世帯員が増加するというパターンが消失し、結婚後の世帯員数の変動は少なくなっていた。また、どの結婚コホートでも近年になって世帯員の出稼ぎが多く、出稼ぎ者を含めると世帯員数の減少はみられなかった。

3. 時代が下るにつれて1組の夫婦がもつ子の数は少なくなるにも関わらず一世帯あたりの世帯員数が減少しない要因としては、近年2組以上の夫婦が同居あるいは共働共食したままのケースが多く、同居あるいは共働共食が以前のように結婚直後に短期間出現する形態から変化していることがあげられる。この背景としては、耕地開拓の限界、既存の耕地の分割の限界、土地価格の上昇等により独立のための土地へのアクセスが難しくなっていること、タイの経済発展にともない出稼ぎが可能となり複数の夫婦と子が入り出る同居が可能となったこと、夫婦が出稼ぎに出て幼児や児童を村の親夫婦にあずける方が生計を維持しやすいことなどがあげられる。

土地と現金を両軸として生産・消費・再生産をおこなう現段階ではタイ東北部の農村の人々は、自然資源の希少化と経済発展の中で、「世帯」という単位を変化させて生産・消費・再生産を維持していると思われる。

タンザニア・マテンゴ農民の定住と移住をめぐる社会生態 A Socio-ecological Study on the Sedentary Life and Migration of the Matengo in Tanzania

加藤 正彦 (KATO, Masahiko)

京都大学アフリカ地域研究資料センター (Center for African Area Studies, Kyoto University)

Keywords: ンゴロ, コーヒー栽培, 父系親族, 規範, 呪い (ngolo, coffee cultivation, patrilineal kinship, norm, sorcery)

タンザニア南西部のムビンガ県に居住するマテンゴ族は、コーヒーを換金作物、トウモロコシやインゲンマメなどを食糧作物として栽培する定着型の農耕民である。彼らが基本としている居住の単位は、父系出自にもとづく10世帯前後の拡大家族である。各世帯は互いに隣接して家屋敷と畑をもち、全体として一つの区画(マテンゴ語で「ムシ」という)を占めている。農民は山地帯に生活しており、隣りあった二つの谷川を境界とする一尾根が、しばしば一つの「ムシ」の領域となる。マテンゴ農業を特徴づけるものに、「ンゴロ」と呼ばれる集約度の高い在来農法と盛んなコーヒー栽培がある。「ンゴロ」農法は、山地斜面において刈り取った雑草を格子状の畝に埋め込むことにより緑肥効果をもたらす、また格子内の穴によって雨季の土壌流亡をおさえる効果をもつ。一方、1930年頃に導入されたコーヒーは、自然条件に恵まれて県中西部を中心に広まった。「ンゴロ」農法と永年作物であるコーヒー栽培によって、彼らは比較的定住性の高い農耕を営んできた。しかしながら、こうした高い定住性は、コーヒー生産の盛んな地域で、1970年頃にはすでに人口稠密な土地利用の状況を生みだし、土地を

もたない農民は未開墾地へ移住するようになった。筆者は人口の多い旧村と開拓村を選んで、農民の居住形態を生態学および系譜的な側面から調査するとともに、聞き取りによって1940年以降の移住の事例について、その年代と理由を尋ねた。

旧村の農民は、もっぱら限られた土地を食糧作物と換金作物の栽培のために利用している。そこでは移住の理由として、土地不足など農業上の理由をあげる場合が多いものの、「ムシ」における親族との葛藤がしばしば直接的あるいは間接的な理由となっている。また、移住しようとする者が、すでに移住している父系の親族を頼って住むことは少なく、むしろ姻族や母方の親族、あるいは知人を頼って移り住む場合が多い。さらに父系の親族員間の居住パターンをみると、長男が孤立して暮らす傾向がある。こうした傾向は、親族内での「呪い」の現象や、親族内における「上下関係の規範」と強く連動している。本発表では、マテンゴの定住と移住に深くかかわる「呪い」と「上下関係の規範」を論じるとともに、邪術的な色彩の濃い今日の「呪い」と社会変容との関係について検討したい。

バカ・ピグミーの祝祭的集会の時間構成：男女の役割分担と相互作用 Time Organization of Festive Gathering among the Baka : Division of Part and Interaction between Men and Women

都留 泰作 (TSURU, Daisaku)

京都大学大学院理学研究科 (Graduate School of Science, Kyoto University)

Keywords: 祝祭的集会, 合唱と踊り, 男女の役割分担, 相互作用, 集团的昂揚感 (festive gathering, chorus and dance, division of part between men and women, interaction, excitement of a group)

中央アフリカ熱帯雨林のいわゆる「ピグミー」の音楽は、集団による合唱、これに伴う踊りという実践の形式によって特徴づけられる。エフェ (Efe) を調査した澤田昌人は、彼らの合唱・踊りの実践形式は、合唱への参加者を昂揚させ、一致した精神状態へと導くプロセスとして構成されていると論じ、その社会統合上の意義を強調

している。

本発表では、上記のような澤田の指摘を受けた上で、バカ (Baka) の合唱の実践に関して、実相に即した記述を試みたい。具体的には、彼らが、これらの合唱の実践を集团的な経験としていかに組織し、成立させているかを、その時間構成に関する事例比較を通して整理・記

述し、これらの活動の重要性について考察してみたい。バカにおいては、集団による合唱と踊りは、居住集団ごとに行われる祝祭的な集会 (*be*) において行われる。これらの実践においては男女の分業が明確である。すなわち、女性は合唱を、男性は踊りを受け持つという固定的な構成が認められる。これらの *be* における両者の行動は、集団的な昂揚感 (*loko*) を協調して得ることを焦点として組織され、操作される。

be のための曲のレパートリーは豊富であり、これらの無数の曲が、短時間の合唱を単位として、休憩をはさみつつ次々に歌われる。バカは、このような多くの曲の継起を通じて徐々に *loko* を達成するものであると考えて

いる。男性による踊りは、女性による歌の継起に微妙に反応して段階的に導入される。*loko* の状態は女性の歌と男性の踊りが相互に作用しあう過程を通じて得られると考えられる。この相互作用の過程への意識的な操作・介入は、口頭で指示したり、また太鼓の演奏を止めるなど様々の手段で、主に男性から女性に対して、より積極的に試みられる。バカにおいては、男女の分業に伴う、両者の非対称を伴った分離は、日常的に見られる構成であり、社会的な一致は両者の相互作用と協調によって達成される。このことは、特に *be* の実践において *loko* の達成として明確にテーマ化され、意識的に追求されているのだといえる。

一山村における雑穀栽培の変遷からみえるもの

A Study of the Vicissitude of Millet Cultivation in the Mountain Village

阿部 克哉 (ABE, Katsuya)

アレン国際短期大学 (Allen International Junior College)

Keywords: 山村の活性化, 定期市, 北上山地 (activity in mountain village, market, Kitakami Range)

1. はじめに：久慈市山根町端神では伝統的な食文化に基づく村おこしとして7年前から雑穀やその料理を販売する市を開催している。今日、雑穀栽培が急速に衰退している中で、この地区では小規模ながら雑穀が栽培されている。しかし、今日の雑穀栽培は伝統的なものとはその意味が大きく異なっている。そこでこの発表では、まず雑穀栽培の変化の実態を明らかにし、その上で変動をもたらしている要因やその背景について分析する。

2. 調査地の概要：久慈市山根町端神は、北上山地の北縁部に位置し、戸数33戸、人口約100人の集落である。1960年頃までの生業は、炭焼きを中心に畜産と養蚕を加え、それに畑作を組み合わせる形態が一般的であった。炭焼きが衰退した後、主な収入源は出稼ぎ、そして賃労働へと移行した。また、近年は養蚕や畜産の衰退も著しい。

3. 雑穀栽培の変遷：雑穀はその定義の仕方によって、含まれる雑穀の種類が異なるが、阪本寧男氏が日本で古くから栽培されていた雑穀としてアワ、キビ、ヒエ、ハトムギ、モロコシ、シコクビエの6種をあげているので、それに従うことにする。この中で端神で栽培されている

のはアワ、キビ (イナキビ)、ヒエ、モロコシ (タカキビ) の4種である。このうち、キビは以前はあまり栽培されず、ここ3、4年で急速に浸透したものである。その他の作物は、かなり以前から栽培されているが、1960年代頃から栽培量が減少し始め、しばらく低迷した後、90年代に入ってから少しずつ増えてきている。

4. 変動の要因とその背景：一時期雑穀栽培が低迷した直接的な原因は、食生活の変化、特に主食がヒエ、オムギから米に代わったことである。主食が変化した背景には3つの要因が考えられる。1つは1960年代に入ってようやく稲作が可能となったことである。それによって米を自給できるようになった家も出てきた。2つめとして、現金収入が徐々に多くなり、農家であっても主食を生産せずに購入することに次第に抵抗感がなくなってきたことが挙げられる。3つめは、1970年代に入ると養蚕の規模拡大を図る家が多くなり、桑畑が増加する一方で相対的に雑穀を栽培する畑の面積が減少してきたことである。一方、1990年代に雑穀栽培が復活してきた大きな要因は、市の開催である。キビの栽培が浸透してきたのも市の影響によるところが大きい。

生態人類学会第2回学術大会(3月21日)

「父」とはだれか?—ナミビア北西部のカオコランドに住むヒンバの事例
Who is the "Father"?— The Case of Ovahimba in Kaokoland, North-Western Namibia

吉村 郊子 (YOSHIMURA, Satoko)

京都大学アフリカ地域研究資料センター (Center for African Area Studies, Kyoto University)

Keywords: 二重出自, 父系出自, 母系出自, 社会的父親, 生物学的父親 (double descent, patrilineal descent, matrilineal descent, pater, genitor)

ナミビア北西部のカオコランドに住むヒンバは、バントゥ系の牧畜民である。彼らの生業の中心は、ウシ、ヤギ、ヒツジの牧畜であるが、小規模ながらトウモロコシの栽培もおこなう。ヒンバは二重出自をたどり、個人はそれぞれ父系、母系の両方の出自集団に帰属する。ある個人がどの母系出自集団に帰属するかは、その母との母子関係に拠るものであるから、それは、彼/彼女が生まれた時点ですでに決まっている。それに対して、父系出自集団への帰属を決めるためには、まず、彼/彼女の「父」がだれかということを決めなくてはならない。さて、ヒンバが話すヘレロ語の親族名称のなかには、「tate」（わたしの父）という語がある。彼らの社会では、一般に、未婚女性が産んだ子どもは母方祖父の子どもとなり、既婚女性が産んだ子どもは彼女の夫の子どもとなる。すなわち、子どもからみれば、前者は母方祖父を「tate」とし、後者は母の夫を「tate」とする。そして、個人は「tate」

の父系リネージに入り、そのリネージの名を彼/彼女の姓とするとともに、自分の父系リネージの集落でさまざまな通過儀礼をうける。また、彼/彼女は、「tate」の父系クランの成員として、そこに課せられている禁忌を守らなければならない。一方の「tate」は、子どもが儀礼をうける際に屠殺する家畜（去勢ウシや去勢ヒツジ）を提供するなど、子どもに対する社会的な責任や義務を果たさなければならないとされる。しかしながら、実際には、こうしてさまざまなかたちで表れる「tate」がひとりに統一されていない例が往々にしてある。本発表では、あるひとりの女性とその子どもたちの事例を中心に、状況によって異なる男性が「tate」としての役割を果たしていることを示し、それにどのような要因が関与しているのかを分析する。そして、ほかのいくつかの事例ともこれを検討し、個人にとっての「tate」とはどういう人なのかということを考えてみたい。

内モンゴルの遊牧に関する研究

アラタ (ALTA)

北海道大学文学研究科 DC

Keywords: 遊牧, 定住牧畜, 人間中心の環境, 街に移住

万里の長城の北側は、古来北方遊牧民の活動舞台であったが、最近数十年の間に南方から農耕民の入植が相次ぎ、草原を開墾して、農業を行うようになった。故に遊牧民は様々な面で影響を受けて、定住牧畜を行うか、あるいは街に移動していた。

日本に於けるモンゴル遊牧に関する研究は戦前は盛んであったが、戦後は調査が不可能であったために停止していた。最近また研究が始まったが、しかし、40年間の空白が残されている。今回の発表は1996年秋の現地調査に基づいて、1940年代から最近までの、モンゴル遊

牧がどのように変化したかを検討したものである。

モンゴル高原の南方は、気候は中国本土に較べると可成り厳しいが、農業はある程度までは可能である。それ故、農耕民の入植が可能になったのである。

農耕民の大量の入植及び換金目的の牧畜への変化によって、家畜の頭数が増加して、植生が悪くなりつつある。植生の変化と共に、野生動物の種類も変化した。人間と直接関係のない動物が絶滅して、関係のある種類が増加した。つまり、自然環境は人間中心の環境に変化したのである。

調査に当たった所の遊牧民は1940年代初頭までは、年間を通じて遊牧をしていた。そのとき、彼らは人口は少なく、家畜は多かった。しかし、1940年代から農耕民が入植し始めてからは、固定家屋が造られ、移動の回数もだんだんと減少し、定住牧畜を行うようになった。1950年代に入ってからでは社会主義の下で、商品化が進まれ、遊牧民の自給自足的な意識は不適應となり、家畜は著しく減少して、遊牧は最終的に放棄された。1960年代からは家畜の頭数を追求するために、飼料の栽培などが行われて家畜の頭数は増加した。以後、1980年代か

らは私有化が進み、牧畜は完全に商品化されて、土地も集約的に利用されるようになった。

遊牧が消えると共に牧畜民は意識も変化し、牧畜をやめて街に出るようになった。調査したある村では民族の比率が大きく変化した。今や元の遊牧民はわずかしが残っていない。遊牧において、人間の行動と家畜のそれは時間-空間的に一致しているが、定住牧畜のそれは分離しているから、人間が家畜から離れることが可能になったことがその原因であると考えられる。

漁撈民の経済：マダガスカル南西部乾燥地域ヴェズの生業様式とその変化 Economy of Fishermen: Change of Vezo Subsistence in the Arid Area, Southwestern Madagascar

飯田 卓 (IIDA, Taku)

京都大学アフリカ地域研究資料センター

Center for African Area Studies, Kyoto University

Keywords: 生存漁業, 商業漁業, 海鼠, 鱈鱗 (subsistence fishing, commercial fishing, trepang, shark fin)

人類は古来、海からさまざまな恵みを受けて生活を営んできた。東南アジア島嶼部からオセアニアに至る海域で育まれた海洋文化はその一例であるが、その影響はインド洋西端のマダガスカル島にまで及んでいると言われる。本発表では、マダガスカル南西部の珊瑚礁域で漁撈を営むヴェズという人々の活動を取り上げ、彼らの生計の成り立ちと現在起こりつつある変化について報告する。ヴェズ男性が日常的におこなう漁撈活動は、網漁、釣漁、銛漁に大別される。これらはいずれも干潮時を中心とした時間帯におこなわれ、出漁時間もほぼ同じである。網所有世帯と非所有世帯を比較してみると、前者では労働力を網漁に集中させているのに対し、後者では釣漁と銛漁を状況に応じて使い分けている。しかし、労働投入量や収穫量の大きな違いは見られなかった。日常的な漁撈においては、大きな投資によって大きな見返りを期待するような漁法は見られず、潮汐のリズムに合わせてながら海に出ることを日課としている、と言える。

しかし、日常的な漁だけを続けていては、彼らの生活は成り立たない。調査期間中の収穫をすべて換金したとしても、家族全員の主食を賄うだけの収入にはならない

のである。日常的におこなう漁とは別に大きな収入を得る機会が必要となるが、ヴェズの人々はそのような機会の多くをやはり海に見い出してきた。とくに、1992年頃から始まった出稼ぎ漁は、大きな収穫を確実に上げる手段として盛んになり、多くの男たちが250 kmほど北方の海域まで出かけるようになっていく。出稼ぎ漁の対象となるのはナマコとサメであり、干海鼠やフカ鱈としていずれも中国・東南アジア方面へ輸出される。これらの漁においては、出漁時間が村での漁に比べて長い代わりに、収穫効率や総収穫量がきわめて大きい。つまり、投資量は大きいが見返りを期待できると言える。ただ、ある程度のリスクも覚悟しなければならない。たとえばナマコ漁においては、漁場が沖合い30 kmのところにあるため、風の条件が悪いと漁場に到着する前に陸へ帰らなければならないことがある。また、サメ網漁でも、収穫の大半はある日捕れた推定160 kgの大ザメに由来するもので、このようなサメが捕れるまでには何日も待たなければならない。このように、投資が小さく安定した漁は村で、博打的な要素が強い漁は出稼ぎ先でおこなわれるようになってきているのである。

マライタ島(ソロモン諸島)とタイ北部の短期休閑焼き畑における労働投入様態の比較研究
A Comparative Study on the Distribution of Labor Input to Short Fallow Swiddens on Malaita Island (Solomon Islands) and in Northern Thailand

中野 和敬 (NAKANO, Kazutaka)

鹿児島大学南太平洋海域研究センター (Research Center for the South Pacific, Kagoshima University)

Keywords: 焼き畑, 月降水量分布, 労働投入, マライタ島(ソロモン諸島), 北タイ (Swidden, Distribution of monthly precipitation, Labor input, Malaita Island (Solomon Islands), Northern Thailand)

はじめに：わたくしは以前、タイ国北部山地のオカボの短期休閑焼き畑への労働投入について、定量的な論文を発表した。1989年以來ソロモン諸島マライタ島でも焼き畑への労働投入調査を実施してきたので、双方を比較検討した結果を発表する。マライタ島の調査地の主作物はサツマイモである。ここで注目すべき両地方間の自然条件に関する顕著なちがいは、月降水量分布である。

調査結果と考察：マライタ島と北タイの労働投入様態の最も大きなちがいは、畑を形成するまでの準備段階に現われる。すなわち、前者では火入れ作業それ自体と、二次林破壊後火入れに至るまでの段階に多大な労力を投入するのに反し、後者ではそのような段階での労働投入はほとんどない。このちがいをもたらす最大の要因は月降水量分布の差異であろう。北タイでは、林の破壊後植物遺体はほっておいても1~2ヶ月で十分に乾燥し、火をつけさえすれば裸地に近いものとなる。それに反し、マライタ島では、切り倒した木を少しでも乾かそうと、2~3ヶ月またはそれ以上放置しておく間に、雑草や木の芽生えがまたはえてきて、火入れするにはもう一度 *slashing* をする必要がある。また、なま乾きの植物をよく燃やすのに、多大な労力を投入する。植え付け後収穫期までの除草に要する労働量はマライタ島の方が北タイよりやや少ない。収穫に要する労働量については、3回イモ掘りをするので、はるかにマライタ島の方が労働量を多投している。サツマイモもこの時期になると地上部が地表面を完全に覆うわけにはいなくなるので、イモ掘りと同

時にかなりの労力を除草作業にさく。二次林破壊時より収穫作業がひととおり終わるまでの1haに対して投入する合計労働量はマライタ島が北タイの約2.4倍である。けれども、マライタ島の調査村民が長時間必死に働いているという感じは受けない。その理由は、サツマイモはオカボよりも土地面積あたりのエネルギー生産量が大きいから、必要最小限を生産するのに必要な管理面積がオカボの場合よりはるかに小さくてすむという点とマライタ島のサツマイモ生産では、焼き畑での投入労働量ピークが顕著でないという点である。成人ひとりのサツマイモ消費量を廃棄分を含めて日平均2kgとすれば、1年の必要量は0.73tonとなる。子供の消費量を平均して成人の半分とし、成人と新生児を除く子供の人口比を1:2として計算すれば、成人ひとりに最低限必要な生産量は1年にはほぼ1.5tonとなる。主調査地でのhaあたりの生産量はやや低く見積もって9tonであるから、1週間あたりの労働投入量が通年、均等に近い働きぶりであれば、1年に合計0.17haの土地を何回かに分けて管理すればよい。北タイの事例について、同様に計算し、次年用の種初も勘定にいと、0.78haの焼き畑の管理が必要となるから、マライタ島と北タイにおいて自給量の主食を得るのに必要な成人ひとりあたり1年間のそれぞれの最小投入労働量の比はほぼ1:2となり、北タイの方が多く、しかも、北タイでは2回目の除草と収穫時の労働量ピークが非常に高い。

学会通信

第2回生態人類学会総会議事録

日時：1997年3月20日(18:30-19:00)

場所：芦原保養所芦泉荘

議長：西田正規(筑波大学)

書記：河合香吏(京都大学)

出席者：97名

議題(報告・審議事項)

1. 学会活動経過報告(会長：田中二郎)
会員数 201(1997年3月18日現在)
2. 1997年度理事選出(会長：田中二郎)
任期：1998年3月の大会まで
田中二郎(京都大)、西田利貞(京都大)、丹野正(弘前大)、佐藤俊(筑波大)、大塚柳太郎(東京大)、松井健(東京大)、武田淳(佐賀大)、口蔵幸雄(岐阜大)、寺嶋秀明(神戸学院大)、佐藤弘明(浜松医科大)

3. 事務局長選出

大崎雅一(兵庫県人と自然の博物館)

4. 会則承認(会長：田中二郎)

5. 1996年度事業会計報告(幹事代理：重田)

6. 1997年度事業予算案承認(幹事代理：重田)

7. 第3回学術大会の開催地について

第3回学術大会は東京大学医学部保健学科(大塚柳太郎会員)が当番校となり開催する。

8. 訃報

第1回生態人類学研究会からの会員である、原子令三会員が逝去されました。

9. その他の報告(会長：田中二郎)

故原子令三会員のご遺族と、伊谷純一郎会員から寄付の申し入れがあった。これらを基金として、不定期の論文集を出版する計画が提案された。

今大会に参加された、S. ワンディバ教授(ナイロビ大アフリカ研究所所長/京都大学アフリカ地域研究資料センター客員教授)が紹介された。

生態人類学会会則

第1章 名称、目的および事業

第1条 本会は生態人類学会(The Society for Ecological Anthropology)と称する。

第2条 本会は生態人類学の発展をはかることを目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 学術集会の開催
2. 定期刊行物の発行
3. 生態人類学の普及・教育・その他必要と認める事業

第2章 会員

第5条 会員は、正会員と賛助会員とする。

第6条 会員は次の権利を有する。

1. 本会発行の定期刊行物の受領

2. 本会発行の定期刊行物への投稿

3. 本会主催の大会の出席と研究発表。ただし、大会の運営については主催機関の調整に従う。

4. 総会の出席と本会運営への参加

第7条 会員は定められた会費を納入しなければならない。

第8条 本会の会費は下記の通りに定め、会費の変更は総会で決定する。

正会員年額 2,000円
賛助会員一口 20,000円

第3章 役員

第9条 会長

会長は学会を代表する。会長は理事の中から理事会において選出する。

第10条 理事

理事は10名以内とし、本会を運営する。庶務、会計、渉外、出版などを担当する。理事は会員の投票により決定する。このほか、必要に応じて会長が若干名を選任する。

第11条 役員任期

役員任期は2年とする。なお、会長の任期は連続二期を限度とする。

第4章 選挙

第12条 理事の選挙は、選挙の年の1月1日における会員による無記名10名以内の連記投票とする。

第13条 得票数が同じ場合は年少の者を優先する。

第14条 選挙管理委員長は庶務理事があたり、若干名の委員を指名する。

第5章 会議

第15条 総会は本会の最高議決機関であり、正会員によって構成され、毎年1回、原則として学術集会の時に会長がこれを召集する。議決は総会出席者の過半数とする。

第6章 会則変更

第16条 会則の変更は総会において決定する。

付則

この会則は、1997年3月20日より施行する。

1996年度決算

収入		支出	
1996年度会費	@2,000 × 104人 208,000	ニュースレター1号印刷費	23,690
		ニュースレター送料	10,130
		事務作業アルバイト代	10,000
		その他	1,472
		第2回大会運営費補助	50,000
		次年度繰越金	112,708
計	208,000		208,000

1997年度予算

収入		支出	
1997年度会費	@2,000 × 200人 400,000	印刷費	
前年度繰り越し	112,708	ニュースレター2、3号	120,000
		名簿	50,000
		通信連絡費	
		ニュースレター、名簿送料	80,000
		事務局諸経費	
		事務作業アルバイト代	50,000
		消耗品費	30,000
		雑費	20,000
		その他	
		第3回大会運営費補助	50,000
		予備費	112,708
計	512,708		512,708

Information

に参加されていた方々の中にも、事務局の不手際から名簿から削除された方がありましたら、お手数ですが事務局までご連絡下さい。

会員名簿と会員数について

会員名簿をお届けいたします。第2回総会では会員数は204名と発表がありましたが、事務局で会員名簿データベースの整理をおこない、無効なデータや入会を希望されない方を削除したところ会員数は164名になりました。

会員名簿の作成には最近の生態人類学学会（研究会）の参加者のデータベースのデータを元におこないました。もとのデータのなかには、一度だけ参加された方も多数登録されているため、事務局の判断でこのような方々を削除させていただきました。これまで生態人類学研究会

生態人類学会ホームページ

Newsletter No.1で、事務局のおかれている兵庫県立人と自然の博物館生態研究部では、WWWサーバーを立ち上げ、ここに生態人類学会ホームページをつくる予定とアナウンスしましたが、館のネットワーク管理の問題で開設が遅れました。第1回大会抄録のhtml化は完了していますので、このニュースレターがお手元に届くころには公開できる予定です。

URLは以下の予定です。

<http://ecology.nat-museum.sanda.hyogo.jp/>

編集後記

- 生態人類学会が誕生して1年がすぎました。くしくも、学会が誕生して1年経たないうちに、前身の生態人類学研究会を支えるバックボーンのおひとりである原子令三氏が逝去されました。
- 1996年2月28日（水）に学会設立のための準備会が京都でもたれ、設立へ向けての基本的方針が決まった直後に、「原子さんなら、学会への移行は反対ですと言いつつじゃないか」という話になって、大いに盛りあがりました。せっかくの機運に水を差す予想ではあったが、世話人諸氏の表情はあくまで無邪気で、私も、こんな発言を原子さんにされると困るなと思う反面、こういう発言こそ原子さんにふさわしいと思っていました。原子さんなしでは生態人類学研究会は面白くなかったし、この研究会の学会への脱皮も、原子さんの存在を意識しないでは成し遂げられなかった。
- 事務局の武田淳が佐賀大学農学部に移り、事務局は私一人になりました。奴隷が欲しい心境です（大崎）。

ニュースレター 1997年7月10日発行
編集・版下作成：大崎 雅一
印刷：土倉事務所
生態人類学会事務局
三田市弥生が丘6丁目 〒669-13
兵庫県立人と自然の博物館生態研究部内
TEL:0795-59-2016 FAX:0795-59-2015
osaki@nat-museum.sanda.hyogo.jp